六、土井利忠と藩政の改革

1　学芸の奨励

利忠が藩主になる　一八二九年（文政十二）、利忠は十九歳で藩主として大野へはいってきました。藩の財政は非常に苦しく、利忠が最初に取り組まなければならない大きな問題は藩政の改革でした。そこで、翌年春には改革の決意を表明し、まず最初に、有能な若い人物を起用することに努めました。内山七郎右衛門（良休）、隆佐（良隆）兄弟をはじめ何人かの才能の優れた若い武士が活躍することになりました。

天保のころの改革の中心は、これまでの改革においても常にいわれてきた倹約の励行でした。一八三六年（天保七）に倹約令が出されましたが、十分な効果をあげることはできませんでした。

そこで、一八四二年（天保十三）、「更始の令」が出されました。これはかつてないほどの厳しい内容のもので、利忠自ら生活をきりつめて、借金を返し藩の財政を立て直そうという決意を表したものでした。武士をはじめ商人、農民など一

般の人々に倹約をすすめ、贅沢な生活を厳しく戒めました。武士の俸給はそれまでの三分の二に減らされましたが、皆それにしたがい、一般の人々も協力したといわれます。大きな商人や地主たちは、この政策に協力して借金の返済にお金を出しました。中には一人で三千両を献金した人まで現れました。

借金の額は九万六千二百両ほどで、現在の金額になおすと数億円にのぼるといわれます。洪水や大きな火事による災害、うち続いた凶作などによって積み重なった借金です。また石高四万石といいますが、実際の収入は一万六千石ぐらいしかなかったといわれます。

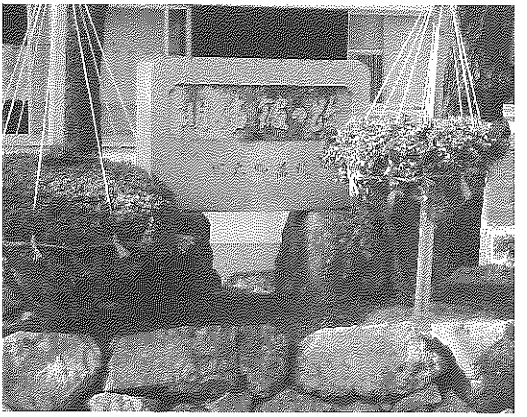
明倫館をひらく　全国各地の大名は、早くから藩校を設けて武士の子弟の教育に力を入れてきました。

一八四三年（天保十四）、利忠は「学校創設の令」を出しました。初めは校舎がないので、会所をそのかわりに使うことになりました。翌年、校舎を新築して、「明倫館」と名付けました。

藩の政治や経済の立て直しには、新しい知識を学んだ人材が必要であるという考えに基づいて、藩校を開いたということはいうまでもありません。一八五七年（安政四）には、学資法を設けて、藩の収入の百分の四を学資に当てることにし

ました。これによって子弟を学ばせる家庭を増やし、生徒数を増加させることをねらいました。

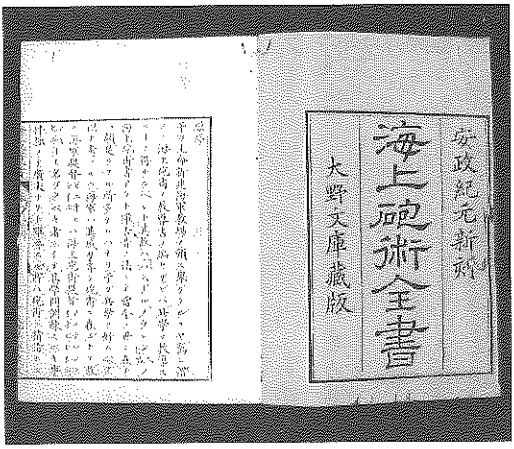
学級は、甲乙丙の三つに分け、丙科は十三歳以下、乙科は十五歳以下、甲科はそれを卒業した者が学ぶことにしました。教科書には、当時最も重んじられた朱子学を学ばせるため、四書五経が使われました。その他、武術、砲術などの訓練も含まれていました。生徒の数は、明治維新前には、寄宿生二十名から三十名、通学生二百名ほどいたといわれます。



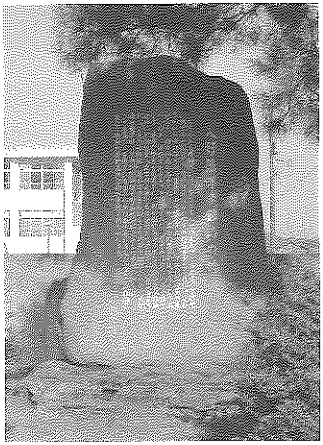
明倫館跡（明倫町）

また、武士の子弟だけでなく、一般家庭の子どもたちも勉強させることが明倫館をつくった時からの考えでした。初めのころは一般の子どもたちの入学は少なかったので、一八五八年（安政五）、お触れを出して入学を広く呼びかけ、その後生徒数はしだいに増えました。

大野藩の洋学　明倫館とならんで藩が力を入れたものに、蘭学の研究があります。一八四〇年（天保十一）に、利忠は小浜藩の医者杉田成卿を江戸



『海上砲術全書』（歴史民俗資料館蔵）

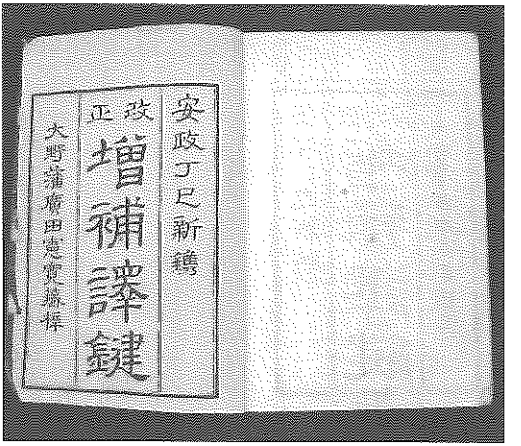


洋学館の碑（城町）

藩邸に招いて、ヨーロッパの事情を聞いたのをはじめ、家臣を江戸・京都・大坂方面に送り、西洋の医学や砲術などを学ばせました。

一八五六年（安政三）には、洋学館を開設し、緒方洪庵の適塾の塾頭をしていた伊藤慎蔵を教師に招きました。また、藩の財政が厳しいなか、高価な本を買い入れて資料を充実させました。教えを受ける者は越前国内はもちろんのこと、諸国から年とともに集まり、遠いところでは長崎・福岡などからも勉強にきました。

また、当時大野藩で翻訳したり出版したりした書物はかなりの数にのぼります。中でも、『海上砲術全書』は全二十五巻からなり、幕府天文方の人が訳したものを大野藩が許可を受けて出版したものです。『（増補改正）訳鍵』は五冊からなるオランダ語と日本語の辞書で、一八



『（増補改正）訳鍵』（歴史民俗資料館蔵）

五七年（安政四）に出版されました。その他、『颶風新話』や『築城全書』、『三兵用訣精論』などの数多くの出版がおこなわれました。今日、蘭学書の勉強にやってくる学者たちも、この本を手にして当時の苦心をしのび、この労作を高く評価しています。

砲術の訓練　利忠は家臣のものに最新の高島流砲術を学ばせ、一八四六年（弘化三）には、性能の最も優れた大砲をつくらせました。そして、新田野（木本野）で五十発の早射ちをおこないました。また鉄砲も盛んにつくらせ、一八五六年（安政三）には、大野でつくられた鉄砲数十挺が江戸に送られ、幕府の警備にあてられました。

アメリカ合衆国の提督ペリーが浦賀にやってきて以来、日本の鎖国は破れ、諸外国との間に和親条約や通商条約が結ばれて、あわただしい情勢だったので、大野藩の領地であった西方の警備には特に注意を払いました。

種痘と病院の開設　利忠の長男が天然痘で死んだこともあって、この病気に対

して特に関心を持ちました。一八五一年（嘉永四）には、試験的に長崎から痘苗を取り寄せ、西谷の本戸の子どもたちに種痘をおこないました。その結果がよかったというので、広く種痘をすすめ、一八五四年（安政元）には強制的におこなうようになりました。

一八五七年（安政四）冬には済生館（済生病院）または医学館という施設を新しく建て、さまざまな病気の治療にあたり、種痘には特に力を入れました。

蝦夷地の開拓　一八五五年（安政二）に、幕府から全国の諸藩に対して、蝦夷地（現在の北海道）と北蝦夷地（樺太）に渡って開墾し牧畜を営み、鉱山の開発を志願するものは申し出るようにというお触れが出されました。大野藩では、内山七郎右衛門・隆佐の兄弟をはじめ、伊藤慎蔵や吉田拙蔵その他の人々が集まっていろいろと相談しました。利忠も賛成したので、隆佐が江戸におもむいて幕府に伺いを立て、許しを得て戻ってきました。利忠は、七郎右衛門を年寄の役に任じ、あわせて蝦夷地のことも担当させ、弟の隆佐を蝦夷地総督の役に任命し、探検に出発する準備にとりかかりました。

隆佐が幕府に出した伺い書には、「このたび蝦夷地開発のことについてのお触れ書きを、能登守（利忠）をはじめ家来ども一同拝見しました。私たちは及ばず

ながら、蘭学や西洋兵学、砲術などを研究してきましたが、それはただ学ぶということのためばかりではありません。その学問を実際に使って国のために役立たせたいと考えてきました。越前の大野というところは、山国でたいへん寒いところで、毎年雪が五、六尺も積もり、時には一丈（約三メートル）にもなる土地であります。私たちは、このような寒い土地で成長し、雪の中も気にとめず山川を歩きまわって魚や獣をとっておりますので、体がたくましくなっております。風や寒暑になれております。まことにまたとない機会でありますので、何とかして国のため、主人のために役立ちたいと考えまして、主人能登守に申し出まして許しを得ましたので、お伺い申し上げます。」と書かれています。

翌年三月六日、隆佐の一行は、江戸を経て陸路蝦夷地へおもむくため、決意を新たにして大野を出発しました。早川弥五左衛門武英や吉田拙蔵、中村岱佐たちの一隊は、これと別れて敦賀から船で蝦夷地へ直行しました。

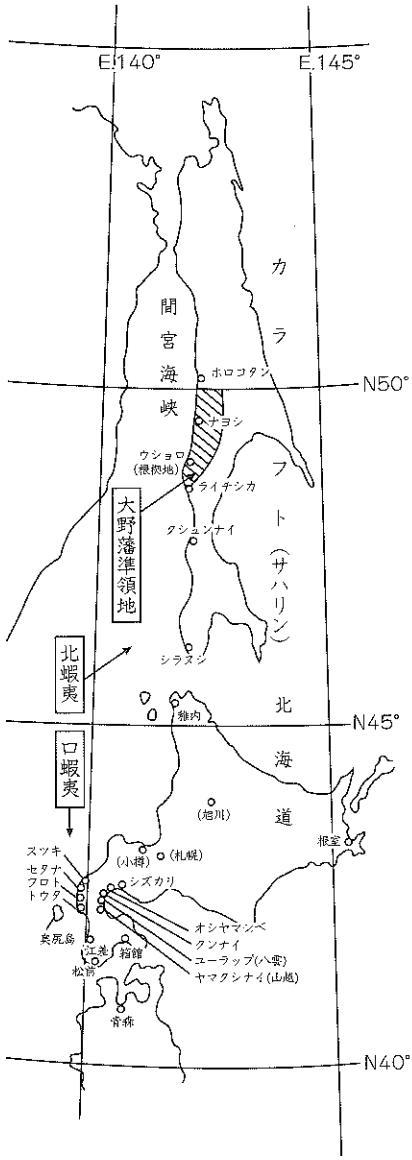
隆佐たちは口蝦夷（北海道）の東海岸を、早川たちは西海岸を探検し、その結果を箱館奉行を通じて幕府に報告しました。そして口蝦夷の開拓を任せてほしいと幕府に願い出ましたが、許可を得ることはできませんでした。

一八五七年（安政四）二月十一日、早川弥五左衛門は、浅山八郎兵衛や中村岱

佐たちを連れて再び大野を出発、陸路を北に向いました。箱館からホロコタンまで進み、漁場をさがし、根拠地としてどこがよいかを調べて幕府の役人に報告しました。

幕府は、北蝦夷（樺太）の西海岸、ライチシカからホロコタンまでの漁場の開拓を許したので、利忠はすぐに早川を屯田司令にし、数十名の家臣を派遣しました。彼らはウショロで年を越すことになり、早川はひとまず江戸に戻りました。

早川たちが北蝦夷の開拓にあたって最も不便を感じていたことは船がないことでした。西洋型の帆船が欲しいということを内山隆佐に頼み、利忠の許可を



蝦夷地（安政３～明治元まで）
（旧『大野のあゆみ』より）

得て、江戸の船場で長さ十八間（約三十三メートル）、幅四間（約七メートル）、深さ三間（約五・四メートル）の君沢型の二本マストの帆船をつくらせました。一八五八年（安政五）六月にできあがり、七月二十五日に品川沖で進水式をおこないました。これが大野丸です。

幕府の海軍所で操縦術を学んだ吉田拙蔵が船長となって、八月六日、大野丸は出帆しました。北蝦夷帰りの早川弥五左衛門も乗っていました。兵庫港（神戸）から下関（山口県）をまわり、九月二十四日、無事敦賀に着きました。

翌年三月、早川は、蝦夷地総督内山隆佐や船長吉田拙蔵たちと大野丸に乗って敦賀をたち、箱館に渡りました。早川はさらに北蝦夷のウショロに渡り、開拓の仕事をすすめました。寒さの厳しい北蝦夷に渡って開拓をすすめた大野藩の人々の苦労は想像以上でした。

彼らは、開拓の資金を援助してほしいと幕府に願い出ましたが、幕府の財政にゆとりがないので、認められませんでした。そのかわり、幕府に対する門番や火消番などのいっさいの御用を免除し、ウショロ一帯を大野藩の領地同様（準領地）に認め、北蝦夷の警備の一部を負担させました。

また同年八月には、大野丸が奥尻島（北海道）の近くの暗礁に乗りあげて救助

を求めていたアメリカの船を助け、感謝されたという出来事がありました。

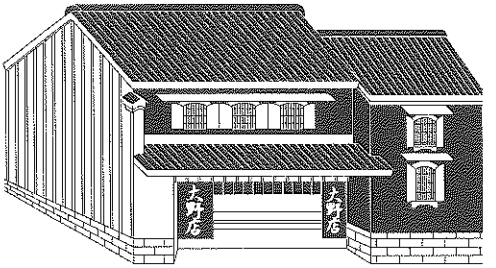
2　大野藩の殖産興業

産業の奨励　大野藩が蝦夷地の開拓にのり出した理由は何でしょうか。大野藩も十八世紀のなかごろから幕末にかけて、財政は非常に苦しいものでした。農業の生産だけにたよる自給自足の生活がしだいに崩れ、さまざまな商品が行き渡るようになり、お金でものを買って生活する社会にかわってきました。また、武士や町人の生活が贅沢になる一方、洪水や火事、凶作などの災害にみまわれ、そのたびに借金を重ねてきました。

利忠が藩主になってから、いまだかつてない厳しい倹約令を出したことは、そのことをよく示しています。しかし倹約するだけでは経済は豊かになりません。もっと積極的に生産の向上をはかり、商業をのばすことが必要です。そこでとられた第一の政策が、大野でつくられる産物の品質を良くし、生産量を増やすことでした。綿糸綿布の改良、漆・こうぞ・桑の栽培、生糸の改良、織物の着色や模

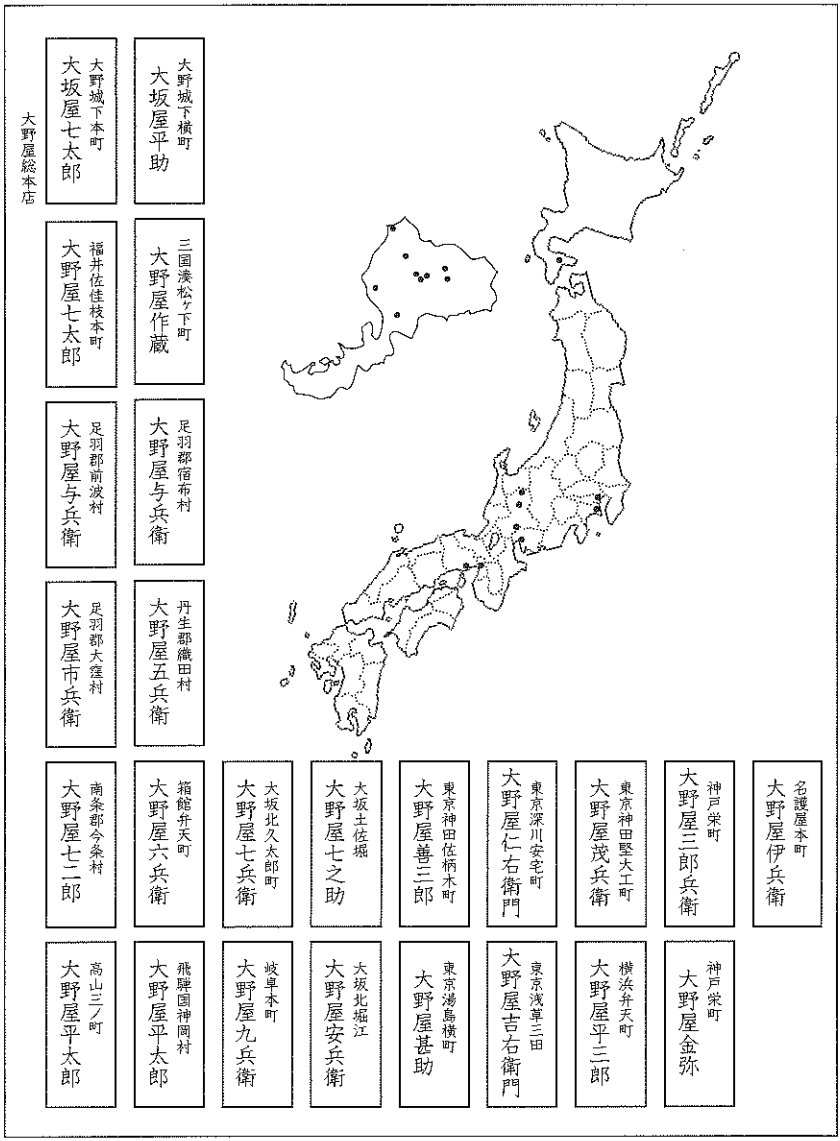
様の工夫などをおこないました。藩では産物所という役所を設けて、それらの指導と監督にあたりました。すすんだ地方から職人を呼んで技術を習うことも怠りませんでした。

面谷「大野銅」の開発と「大野屋」の交易　次に、面谷鉱山の改革があげられます。鉱山の役人に生産の増加をはかるよう注意をあたえ、鉱夫たちにもっとまじめに働くよう厳しく申し渡しました。面谷から産出する銅は品質が良く、細工物に適していたため、大坂堂島でも「大野銅」のブランドで比較的に高値で売れたといわれます。面谷を大野藩直営の鉱山にし、内山七郎右衛門を銅山用掛頭取に任じて開発に力を入れた結果、良質の銅鉱が多量に採掘されるようになりました。その結果、全国でも上位の銅山となり、藩の財政を立て直す最大の財源となりました。



箱館の大野屋

各地に大野屋をひらく　第三に、各地につくった大野藩直営の大野屋と呼ばれるたな（店）の経営があげられます。利忠は、七郎右衛門が出した、大野の産物を大坂その他の都会へ売り出して利益を上げることをはかってはどうかと



全国の大野屋店舗（坂田玉子氏の研究による）

いう積極的な案を取り入れ、一八五五年（安政二）に、まず大坂に店を開き、きざみたばこを販売しました。翌年には箱館と織田村（織田町）に出店しました。特に箱館の大野屋は、蝦夷地の開拓と強く結びつき、蝦夷地における大野藩の勢力を背景にして、一段と繁盛していきました。

一八五九年（安政六）、横浜や長崎、箱館が開港し、アメリカやイギリスなどの五か国との貿易が許されると、大野屋はにわかに活気をおびてきました。同年に大野町の一番町（本町）、一八六七年（慶応三）には岐阜に出店しました。

商品は、たばこ・和紙・漆・生糸・絹織物・麻などの大野地方でとれるもので、店によっては、蝦夷地の乾物類を扱うところもありました。内山隆佐が残した記録には、箱館の大野屋へ運ぶ商品の名前があげられていますが、それには関西から四国・九州におよぶ各地の重要な産物がたくさんあります。大野屋から送り出すものには、こんぶや干物など蝦夷地の産物がいくつも書かれています。その中間にあって輸送の役を受け持ったのが大野丸でした。敦賀や三国の港に大野丸の姿をみることは、他藩の人々には大きな驚きでした。

大野屋は、明治にはいってからは、今庄・三国・福井・大坂・名古屋などに店を増やしていきました。明治以後は藩を離れて経営されました。

岡島辰五郎と大野との関係

岡島辰五郎は、一八八〇年（明治十三）、大野藩の家老を務めたことのある家の四男として大野町水落で生まれました。有終尋常高等小学校を卒業後、東京の共立美術学校を経て、東京美術学校鋳金科に入学しました。在学中は大野藩の藩営商店、大野屋の代表者である「大坂七太郎」の名を名乗っていました。これは、当時面谷鉱山から産出していた良質な「大野銅」を使って銅器をつくり、大野屋で売り出そうという目的があったからだと思われます。しかし、卒業した時には大野屋は金融業に商売がえを考えていたことや、美術学校の卒業生の多くが海外に渡り美術作品をつくることがもてはやされていたので、辰五郎も美術学校で学んだ金工の技術を生かそうと、一九〇七年（明治四十）にアメリカに行きました。

アメリカに着くと、宝飾店として有名なニューヨークのティファニー社に就職しました。当時、アメリカでは日本の文化が大流行しており、ティファニー社でも日本の意匠をまねたアール・ヌーボー様式のデザインを売り出し大当たりしました。辰五郎も、その様式で有名なティファニー・ランプなどのデザイン画を残しています。

その後、世界的な東洋古美術商であった山中商会での仕事を経て、一九三四年（昭和九）に独立し、ニューヨークのマジソン街の目ぬき通りに「日本美術商会」という会社を開業しました。太平洋戦争中、多くの日本人が収容所に入れられましたが、辰五郎は大富豪のロックフェラーと友人であったことから日米協会に協力していたので、戦争中も自宅で営業していたといわれています。

戦後、八十二歳で亡くなる四年前の一九五八年（昭和三十三）に、ニューヨークで収集した日本の古い金工品を中心にした「岡島コレクション」と、それを展示する岡島美術記念館の建設資金や運営資金を福井県に寄贈し、福井市お泉水前に福井県で最初の美術館が誕生しました。

その後、一九九〇年（平成二）になって老朽化した館は取り壊され、現在、コレクションは福井県立美術館に収蔵・展示されています。

水戸浪士の騒動　水戸藩の尊皇攘夷派（天皇を尊び外国の勢力を追い払おうという思想を持つ人たち）の志士であった武田耕雲斎たちの一行は、筑波山（茨城県）で挙兵し天狗党の乱をおこしました。その一行が京都にのぼる途中、美濃（岐阜県）から蠅帽子峠を越えて大野にやって来るというので、大野はたいへんな騒ぎになりました。笹又峠で彼らが来るのを食い止めようと考え、夜営できないようにするため、秋生や中島、笹又などの民家を焼き払い、橋も落としてしまいました。

一八六四年（元治元）十二月、一行八百人余りは峠を越えて秋生にはいり、笹又峠を越えて、なんの抵抗も受けることなく木本に到着し、そこで泊りました。

町年寄の布川源兵衛が、大将の武田耕雲斎に、大野町に入らず宝慶寺から池田の方へ行くならば、軍資金を出し道案内もしようと申し出ました。そこでかれらはこの申し出を受け入れ、ようやく木本を出発しました。大野城下の人々は難を避けることができ、たいへん安心しました。

しかし、西谷の村々を焼き払ったので、その復旧の仕事は簡単ではありませんでした。家を焼かれたものには資金を貸して家を建てるようにすすめましたが、藩の財政も苦しかったので、十分な援助を与えることはできませんでした。「浪人焼け」といい、苦しい思い出として村人の間に今でも語り継がれています。

3　大野藩の西方（西潟）領

西方（西潟）とは、現在の丹生郡織田町を中心とする十三ヶ村のことで、一六二四年（寛永元）から大野藩が支配することになりました。この地の石高は四千六百十五石余りで、江戸時代の中ごろには約三百六十軒ほどの家がありました。

大野藩の領地の一部であったものの、おもな地域から離れてほかの藩の領地に

禅興寺山門（織田町）

囲まれた土地なので、一般に飛地といいます。大野藩では、この十三ヶ村の村々を西方と呼んでいました。この西方を治める仕組みとして、大野の支配地と同じように、地方役人として大庄屋―村々庄屋―組頭―百姓代をおきました。織田村は大きな村であったことから、一組と二組（のちに三組）にわけ、三役をおき治めました。

西方領の中心地は織田で、一八五〇年（嘉永三）に織田の鎌坂に織田陣屋（代官所）を新築しました。初代の代官として内山隆佐を任じ、そのほか七、八名の侍をおき、行政と取り締まりにあたらせました。犯罪防止に努めたので、村人から喜ばれたということです。当時の陣屋門は、禅興寺（織田町）山門として移築され、保存されています。

一八四三年（天保十四）には、藩主土井利忠も西方を巡視しています。一八五

〇年（嘉永三）には、小樟（越前町）の黒崎に大砲場を築き、いざという場合に外国船を追い払う用意をし、海岸の防備を固めました。

一八五六年（安政三）には、織田村にも大野屋が開設され、大野でつくられた品物を売ったり、他の地方からも品物を運び販売しました。特に織田の大野屋では酒造りもおこない、大いに稼ぎました。一八七一年（明治四）の廃藩置県の際に大野県織田出張所となりましたが、その後は大野とは関係がなくなりました。